

Title	Cliché序論 (3) : モームの文体とCliché
Sub Title	The style and Clichés of W. S. Maugham
Author	富永, 道夫(Tominaga, Michio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.13, (1961. 12) ,p.111(36)- 129(18)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00130001-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# Cliché 序論 (3)

——モームの文体と Cliché——

富 永 道 夫

## I

本稿は cliché 序論と題して中京大学論叢教養篇第1号、第2号に掲載したものの続きであるが、内容的には芸文学会第17回研究発表会に「サマーセット・モームの文体と cliché」について発表したものを骨子として、これに加筆修正したものである。

ここで取り上げた主題は、モームの文体の特徴について、出来る限り具体的に分析説明する事であるが、主として英語の常套表現或は紋切句と云われているものの使用を主眼とする立場から彼の文体を観察する事である。これらはモームの作家としての一面を明らかにする鍵ともなり、且つ style や cliché の問題を論ずる為の一つの具体的好例を提示する事になると思う。

文体を論ずるという事は、語学的に極めて六ヶしい事であると同時に、文体論という觀念についても見解が極めてまちまちであり、或る人はクローチェやバイイの言語美学を論考し、修辞学的文体論を展開するのであるが、具体的に或る作家をとり、これを英語という語学的背景の下に論究しようとする時、その学理と実際問題との連関の具体性の弱さ及び方法論的不明確というか、極めて主観的な觀念論や印象論に結局は随ってしまう場合の極めて多い事は、最近雑誌などに於て急激に盛んになって来た文体論の表題も、多くは諸外国の文体論学の紹介と2、3具体的な作家の文体に関する個人的見解を述べるに止る場合が多く、この両者の間に密接な必然的関連を見出す事の困難さに驚かされる。

文体を論ずる事は、結局は結果的に記述された文例について叙述的な考察を試みる事

であるが、ここで極めて大切な事と思われる事は、或る作家の作文態度であり、筆のおもむくままに書きなぐって功をなす人か、或は精密な計算的知識の上に立って文体を組み立てたものであるか、という事などの点を具体的に把握しようとする事である。勿論 *Le style est l'homme même* という様な事は、モームの文体についてもいえる事であり、彼の artificial な用語法の間からも、彼の性格がそのまま現れるのは当然な事である。しかしここではその様な事とは別に、彼の作文法の態度、即ち心理的な面よりも、外面的技術的な面から彼の文体を観る事に重きを置いている。そこでこれらの興味をつなぐ前提として、彼が英語の文体を外口語を学ぶに近い条件から出発して、苦心の末彼の文体を築き上げるに至ったという仮設条件から出発して見る。\*

## II

モームの英文を典型的な英語の現代文とし、そこに現れる豊富な colloquialism を範としている向きすらある様であるが、以上の理由から彼の魅力はこの、他の普通の作家と根本的に異なる条件から来る必然的結果として、彼の文体の特殊性が流行を生み出した、即ち彼を流行作家たらしめた一因をなしていると考えられない事もない。

モームの文体の表面はあっさりしている（少くともあっさりと思わせている）。表面は既成イディオムやクリシェイでおおわれている。センテンスはおおむね短く、構成も単純であり、特徴的である様で、よく見れば実は伝統的英語の型から多くを出していない。彼はこれにシノニムを色々変えて見て、文体に立体観をつけている。時々彼の個性が、長びいたややくどいセンテンスや意識的に切断した様な短い終止法に現れ、*Le style est l'homme même* を裏づけている。而るに、この表面に現れる idiom や colloquialism は何故こうも多いのであろうか。

cliché の方面から文体を見る事は六ヶしい事であるが、彼の場合作文法の態度方法その他の条件から、必然的に常套句の広範位な使用という線にもっていかれた事が、当然の見方として考えられる。モームの生い立ちなどに関しては、昨今くわしい知識が提供されて居るが、彼の作文法に関する態度については、彼の晩年の著作 *The Summing Up* に於て述べている様に、Swift の散文を範とし、この一部をくり返し書き写し研究している内に、しまいには自然に Swift 的な文章を書ける様になった、つまり何を書いて

\* 外国語を学ぶに近いといっても、勿論所謂外国人の英語とは根本的に違うであろう。唯 natural-born の英語国民の文章家として見る時、この様なハンディがあったと考えられる。

も、あたかも Swift が書いている様に自然と筆を運んでしまうといった様な書き方を身につけるに至った事及び大英博物館などで木や動植物などの名前を書き写して、丹念にこれらを憶えたという記述によっても、彼の文体作成に対する労苦の程が明らかである、と同時に結局彼がこの様な方法を通して、英語世界に立派に通用する文体をのみ出すだけでなく、自分自身のみならず、他の人の文体に対する感覚をも植えつけられるに至る基礎を作ることになった過程がうかがわれる。モームは文体というものは、いづれも他のすぐれた作家の模倣或は精密な研究を通して作り上げ得ると信じこれを実行した。これは彼が読書の際異常に文体に興味を持つ事からも伺える。

外国語に近い条件から文体に相対する時そこには第六感的感じよりも、知識の上に立つ事即ち判断力の基準が或程度学問的知識の前提を通して達成される向きの多いのは当然の事であって、ここで我々はモームがこれらの感を知識を通して、即ち何かしら意識的操作という先入感を通して得たものか、或は母国語に対する自然的な（といっても後天的知識はここでも不可避的であると考えられるが）感をもっていたかを知らなければならぬが、この点について、我々は局外者の判断からでは確答をなし得ない。そこでこの問題に関連をもつと考えられるモーム自身の文体観を、彼の作文法に言及するに先立って考える必要があると思われる。

### III

先ず彼の文体観の第一は、彼が文体を極めて大切なものとして扱っているという点である。モームが彼の文体を構成するに当って、どの様な文体感覚で当たっていたかという事は、*Books and You* に於て批評家の文学作品批評態度の不適当さについて色々批判した後、*But they did not seem to think it worth while to say much about his style*（而しながら批評家達は、作家の文体については多く語る価値があるとは考えていないらしかった。）と述べている様に、文体が文学的効果に即ち読者の心を直接的に打つのに、最終的に重大な役割をもつという点を敏感に感じているのに外ならない。これは彼の読書態度に於てもいえる事である。例えば Hawthorne にしても内容はつまらないが文体が清明であるから人の心を打つのであると云い、表現上の特長を見分けるのにも極めて敏速である。この例として、やはり *Books and You* に文の様な文章がある。

Hawthorne formed his style on the great writers of the eighteenth century. Such a phrase as: "there was never in his heart so much cruelty as would have brushed

the down off a butterfly's wing," might well have been written by Sterne, and he would have been pleased with it. (ホーソーンは文体を、十八世紀の大作家達に学んで作り上げた。例えば「彼の心には蝶々の羽から粉をふり落す様な、そんな残酷性はなかった」の様な句は、スターンによって書かれても良いだろうし、彼も又これが気に入るであろう。)と述べ更に

Hawthorne had a delicate ear and great skill in the construction of an elaborate phrase. He could write a sentence half a page long, rich with subsidiary clauses, that was resonant, balanced and crystal-clear.....His prose had the sober opulence of a Gothic tapestry, but under the restraint of his taste it never became turgid or monotonous. His metaphors were significant, his similes apt, and his vocabulary fitting to his matter. (ホーソーンはせん細な耳と、こった文を構成する偉大な技術を持っていた。彼はよく鳴りひびき均整のとれ、すっきりした半頁にわたる従属節豊かな文を書く事が出来た。……彼の散文はゴシックつづれ織りの静かな豊かさだ。しかし彼の趣味から来る抑制力でもって、彼の散文は決して仰々しくなったり単調になる事はない。彼の陰喩は含みがあり、直喩は適切であり、彼の用語は事件の叙述にぴったり合っている。)

という風に極めて具体的に(といってもこれは修辭論の文体論であるが)論評している。亦 Henry James の *The American* の文体を評して、「透明で優雅でやや大げさな所のある文体」と評し、更に具体的に彼の文体では、例えば go away と云わず depart といい、go home といわず repair to their domiciles といい、go to bed といわず retire というという様な、用語上の特徴を挙げ、これらが時代物的風味をただよわせて面白いと述べて居る。

以上の引用などから再び前にとり上げた問題、即ちモームがどれ程文体評価の基準をつかんでいたのかという問題が、彼の文体観を云々する底流となると考えられる。\*

例えば retire や slumber の様な云い方は、Brontë の *Wuthering Heights* や Hawthorne の *The House of the Seven Gables* などによく見られる云い方で、これらは特に James に限った事ではないものであるし、これだけを以てモームの文体観を云々する事は早計である。モームは前述の *The Summing Up* に於て、一頁の中で同じ単語を

---

\* 我々が synonymous な表現の文体的違いに言及する時、これを語学的な知識などに照して感じるか、漠然と所謂感じ(恐らく読書量の多きなどから来る)で判断するかの点を考える事は重要な問題であると思ふ。これに関しては、「語法と文体」と題して研究社「時事英語研究」に近く発表の予定である。

なるべくくり返さず、他の *synonym* や *synonymous expression* を用いるのが、英作文の大切な点であると教えられたと述べて居るが、これは英米の英作文指導書に書かれているいわゆる定跡の一つであり、彼はこれに正しく従った事になる。彼の *synonym* の使い方の特徴的な事は、あたかも *Thesaurus* を前に文を書いている印象を受ける事は、別の機会にも書いた事であるが、これらの点からも、モームの文体判断の基準は意識的というか学んで得た知識を背景として（勿論書いている瞬間は流れる様に書いても）いるという感が深い。

#### IV

次にモームのこの文体観に関連して、彼の作文法の根柢、彼の *style* の後進性、慣用句常套句の豊富な使用から来る *cliché* 化の問題、などを総括的に見てみると、先ず彼が比較的平易な散文の典型として広く称賛されている *Swift* の文をまねる事から出発した事は、己に述べた通りであるが、この基本的な外形の中に、彼は極めて豊富に英語の紋切句常套句をおり込んだのである。勿論小説の会話などは、多分に写実性をもっているものであるから、当時この様な表現がよく語られていたと推定するに困難はないのであるが、普通の文体たる散文の箇所にも、彼は所謂 *colloquialism*, *idiom* を巧みに使用して、英語的にひびかせる様努力したと見られる。モームの文体の大きな特徴は、この様に *colloquialism* が極めて豊富な点であって、英米現代作家でこれ程常套句を使って書いた人は他にないといっても過言ではないであろう。例えば *simile* 一つをとっても、*Graham Greene* は極めて独創的な表現を用いモームの伝統性の継承と好対称をなしている。\*

それでは何故 *colloquialism* や *idiom* をかくも巧みにしろ、多量に使ったのであろうか？ この理由として考えられる事は、(1)一つには彼自身英語の *collocation* を作って行く自信がなかったのではないかという事、（これはやや考え過ぎで、勿論我々のおかれた環境とは本質的に異なるから、速断するには問題があると思うが）(2)次に何かしらこれらの常套句に先入感があった、即ち *idiom* を上手にを使って書く事が、上手な英文を書く敏経と教へられ而も本人自身、これが唯一無二の無難な方法という先入視があったのではないかという事。この様な見方が考えられる。勿論会話は一般に問題の圏外なの

\* *Agatha Christie* も比較的或は相当といつていい程 *idiom* を多く用いて文を書いているが、所謂 *story-teller* は話上手口上手である必要から、常套句に結びつき易いとも考えられる。又 *G. Greene* の文体は、或る英人 *W* 氏によれば、多分にアメリカ的で伝統的な英語ではないとしている。

で、Smith の *Idiomatic English* の dialogue にも豊富に出て来る常套的表現の例と共通であるが、この点にしても彼の後進性を示す一面であると考えられない事はない。これらの点について興味ある一文が、*Cakes and Ale* の中にあるので引用して見る。即ち

The wise always use a number of ready-made phrases (at the moment I write 'nobody's business' is the most common), popular adjectives (like 'divine' or 'shy-making'), verbs that you only know the meaning of if you live in the right set (like 'dunch'), which give a homely sparkle to small talk and avoid the necessity of thought.

The Americans, who are the most efficient people on the earth, have carried this device to such a height of perfection and have invented so wide a range of pithy and hackneyed phrases that they can carry on an amusing and animated conversation without giving a moment's reflection to what they are saying and so leave their mind free to consider the more important matters of big business and fornication.

(賢明な人は、いつでも数多くの既成句〔さし当り私は nobody's business が最も一般的だと書いておくが〕や通俗的形容詞〔divine とか shy-making など〕や、あなたが正しい社会に住んで居れば、意味のわかる様な動詞〔dunch の様な〕を使うものである。それによって、ちょっとした談話にささやかな輝きを与え、そして考える必要をなくするのである。

世界で一番能率的な国民であるアメリカ人は、この技術を完璧の高さ迄おし上げ、非常に広範囲の力強い又すたれた句を發明した結果、彼等の云っている事を一々考える事なしに、面白い、しかも生き生きした会話をする事が出来、従って大仕事とか情事などの様な、もっと重大な物事を自由に考えられる様心に向けられるのである。)

と述べているが、この要旨は結局色々な場合に適するきまりきった表現によく通じておき、それを上手にどんどん使うのが何にもまして手っとり早く、且つ賢明であるという様な事になる。これが純粹に彼の云う生活の合理性から出たものか、或は先に述べた一種のぼろかくしのつぎぎれの役目をなすのかは、判然と区別しにくいのであるが、結果的にはこの様に多くの idiom や colloquialism を含んだ文体が出来上り、これがやがて時代の経つと共に cliché となって来るのであるが、これと関連して彼の文体を彩る保守性についても一考を附して見る必要がある。彼は先に見た様に、Henry James の文体に散見する古い表現が、時代物的感じを与えて楽しいと述べているが、彼自身の文

の中にも、時折この様なやや古めかしいと思われる用語や文型を採用している。例えば *luncheon, a man of five and thirty, when the time came for me to retire* など、其他幾つかの例に示され得る様な、やや古式がかった文型をおり入れる点などに、その凝古趣味が伺われる。又フランス語や古い英語文体によく見受けられる *Sandwich Construction*\* を多く用いる事、又 *idiomatic* な対句 (*doublet*) をやたらに使う点など、正統的に見た現代作家の文体と、やや趣を異にするかの様である。

これが *cliché* になり易い常套句の広範位な採用にも現れていると云えると思う。或は彼はこの様な文体の矛盾を感じていたかも知れないが、彼が散文に対して持つ一種の本能的操作である *fluency* の尊重という面が、表面に強く出すぎたとも考えられる。彼は常に読者から見て読み易いという点に敏感であった。

彼の文体に関して 英人 C 氏がモームの文体は三十年程前に流行した *colloquialism* だらけで今では全く時代遅れであるから真似るなという話は、前号に扱った事であるが米人 F 氏は、モームの文体に関して、彼が果して意識して古めかしい言い方や通俗表現を採用したかどうかは、はっきりわからないが、結果的には確かに何か風変わりな所が出来、それが何かしら魅力となっている。それは人々は、いつも新奇を求めるからだろう。而しモームの魅力はその文体によるのではなく、むしろその *plot* や内容による所が多い、という意見を言っている。又彼の後進性の一面として、やはり *Books and You* の中に於て

*Fashions come and go in literature and it may well be that the hairy-chested, rough-neck prose which is in favour today will in the future lose its vogue. It may be that readers will ask for a more formal, a more distinguished way of writing; authors then will be glad to learn from Hawthorne how to manage a sentence of more than half a dozen words, how to combine dignity with lucidity, and how without pedantry to please both the eye and the ear.*

(文学にも流行りすたりがある。あの今はやりの胸毛の濃いごつい散文も、将来流行らなくなるだろう。読者のもっと形式ばった、もっと抜きんでた書き方を求める様になるだろう。そうすれば、六語以上の文章をいかに扱い、厳粛と透明をいかに結びつけ、

---

\* *Sandwich Construction* とは、便宜上筆者が借用命名したもので、動詞とその目的の間に修飾句の入った文型である。

Ex. 1. *And he had also in that garden many fair flowers.* — John Mandeville

2. *Then afore him he saw come riding out of a castle a knight, and.....*

— Thomas Malory



気どらずに目と耳の両方をどう楽しませるかについて、作家達は喜んでホーソンから学ぶであろう。)

と述べて居る。彼のこの様な保守性が、最後に扱う cliché と彼の文体を論ずる背景の一つの面を形成すると思われる。Eric Partridge が 1940 年に出版した cliché の辞典には Jack London の *The Call of the Wild* や John Steinbeck の *The Grapes of Wrath* などについては、色々言及して居るが、不思議な事に Maugham の名については、全く無視されて居るかの様に言及されていない。しかも彼の選んだ cliché の例は、あたかも Maugham を主要な対象としている様に見えると言っても良い位 Maugham の作品に見出される。Partridge の判断の根拠は、或る意味では科学的基盤に立ったものではないので、主観的独断的と見られる向きも多いのではあるが、一方 Maugham が陳腐な表現に対する彼の気持を表していると思われる一文が、彼の比較の後期の短篇集 *Cosmopolitans* 中の “The Closed Shop” の中に見出されるので、これを引用して見ると、

Everything went as merrily as a marriage bell, if I may use a phrase that, however hackneyed, in connection is irresistible, till one day madame Corali came to the conclusion that she had had enough of it.—*The Closed Shop*

(もし私がいかにいい古されたものであっても、この場合ぴったりする句を使って良いならば、或日コラリー夫人がもう充分満喫したという結論に達する迄万事は結婚式の鐘の音の様に楽しく運んだ。)

merry as a marriage bell は、m の頭韻をふむ常套表現で、恐らく現在では cliché といって良いものであるが、上に引用した文から見て、Maugham が常套的な表現と新奇な表現を意識的に区分する判別力は十分あり、決して盲目的に常套句を濫用したとは考えられない。むしろすべて意識的計算的である。而るにそれにも抱らず、彼が敢てこれらの紋切句に愛着を感じ作品中に多く使ったのは、今の文例で云う様に或る situation で他に代るべき表現のない唯一無二の、説得力あり効果的な表現形態と感じたからか、或は彼の英語の力から起因するものなのか、このどちらかであろうと思う。勿論前者の場合を是とする見方の方が普通であろう。即ち文体への善悪の感覚は、すでに本能的(もともとは意識的或は先入視的であっても、次第に無意識的な感になってしまっている)なものとなって居り、その点から見て *Le style est l'homme même* も又真なりと云えるかも知れぬ。

Partridge は彼の著書 *Usage and Abuse* の中で次の様に云っている。

A large class of English idioms consists of phrases in which two words are habitually used together for the sake of emphasis, e. g. free and easy, by and by, spick and span, thick as thieves, etc.

(英語慣用語の多数は二つの単語が強調の為習慣的に組み合わせられた句から成っている——以下実例)

上例にある様な二重句も、又極めて Maugham の文中に多く見出されるのは当然であって、その内 cliché や idiom と見なされるもの以外の例でも豊富に見出される。

- Ex. 1. Next morning was *cold and raw*. — *Cakes and Ale*  
2. Suddenly R. looked very *cold and stern*. — *Ashenden*  
3. His manner was *pleasant and cordial*. — *Ashenden*

上例の様な word-combination は、唯口調或は強調的に作られた場合が多く、 cliché 的な用例としては「Cliché 序論(1)」の36にあげたものなどが、あてはまる。

## V

次に Maugham が範としたと云われる J. Swift の文体と Maugham の文体を比べて見ると、成程当時の作家としては典型的な砕けた口語体で文を書いた Swift と、口語的な面では相似る所が多い。Maugham は Swift の文体の外かくを模倣したのであるが、Swift は関係詞を含んだ complex sentence を比較的多く使うに反し、Maugham はどちらかと言えば、接続詞や句点で並列させる compound sentence ないし simple sentence を多く用いている点が注目される。Maugham の文の現代的 speed 感は、Swift の持つ speed をゆづり受けたものであると考えられる。次に idiom の使用に眼を転じて見ると、Swift はいわゆる idiom の使用が少い。従って現在から見て cliché といわれるべき文例に余りぶつからない。

- Ex. 1. ; and my father *now and then* sending me small sums of money, I.....  
— *Gulliver's Travels*

2. These insects were as large as partridges; I took out their stings, found them an inch and a half long, and *as sharp as needles*.  
— *Ibid.*

上例 1. の *now and then*, 2. の simile は共に cliché と見なされ得る型ではあるが大して objectionable なものではない。*now and then* は Partridge によれば十八世紀か

ら cliché 化した事になっているから、十六世紀からひんぱんに使われ出した事から見て、当時既に cliché 的要素があったという見方も出来なくはないが、いづれにしてもそう大した問題ではない。Swift の文中にはいわゆる含みある慣用句は余り見当たらない。この点 Maugham は異って居り、彼は Swift の外形を idiom で埋めたという事がいえると思う。

次に Maugham の文体を論ずるに当り、彼とやや相似た過程を辿ったと考えられるポーランド生れの Joseph Conrad の文体と比較して見ると、この両者の文体は、全然異なるものである事が注目される。Conrad の文体は、idiomatic ではない。彼は doublet を多く使いはするが、いわゆる idiom で平易に口語的に書かず、どちらかというと非常に装飾的な単語を多く用いて dramatic に書いている。唯文法或は用語法については、所々不自然な所があり Maugham はその様な点が感じられないと米人 C 氏が語っている。\*

以上の点から見て、Maugham の文には cliché とレッテルをはられる母体となる様な idiom が多く見出される事は、他の色々な作家の文体と比較する時明らかであるが、\*\* 更に彼の文体には次にあげる例に似通った一種の Text-cliché と見なされるべき文例によくそう遇する。

Ex. 1. Meanwhile the hero's stupid, insensitive, greedy, cunning, loudmouthed, backslapping, drunken and even crippled slob of a father, all-American marketype of the guy with the big business and the teentsy soul, reaches down to the bottom of his heart and comes up with a moldy collection of pragmaterialistic clichés: "Son, don't you go too far with that girl. If she gets pregnant, you'll have to marry her and then you couldn't go to Yale. What you need—heh, heh—is another kind of girl on the side."

(和訳省略)

—Time, Oct. 13, '61

この例で云っている cliché とは、古めかしい道德律の事であるが、Maugham は宗教的・道徳的な戒律や説教めいた言葉に対しては、異常に反ばつを示し、伝統的保守的な思想に対して進歩性を極度に示さんと試みるのであるが、他面に於て案外この種のもの

\* 外国人の英語に関しては Charles. C. Fries 教授が Jespersen の生前の英語を評して、Jespersen の英語を話すのを聞き、彼と話したりして彼の英語は完璧と言って良い程立派だった。唯強いていえば、時々我々ならそうは云わないという様な表現をしたと語っている。

\*\* Agatha Christie も相当 idiom を文中或は小説の会話の中におり込み、又時折古めかしい固い文型を使ったりする点 Maugham とやや似ているが、Christieの方が自然に出て来たという印象を受け意識的な感じが少い様と思う。

いってよい古めかしいモラルをふり廻して来る所がある。これらはアメリカなどに多い徹底せる *hard-boiled* 型の作家達から見れば、又一種の *cliché* という事になるかも知れぬ。「*Cliché* 序論(1)」の中に挙げた文例

2. *But you cannot allow your only brother to go to gaol.*

などはこれに属するものと見る事が出来る。

## VI

次に *Maugham* の文中に見出される *cliché* の実例を見討して見たいと思うが、これについては、「*Cliché* 序論(1)」に己に一部扱ったので、ここではこれらと重複しない、いくつかの例を挙げて考察して見たいと思う。これらの例はいつれも *Partridge* が *cliché* とレットルをはった慣用表現である。

Ex. 1. *'Oh, yes, they're the flash in the pans. I, ve known them'*

—*Cakes and Ale*

*flash in the pan* は動詞として *lit. said of a gun, when the priming powder is kindled without igniting the charge; fig. to fail after a showy effort, to fail to 'go off.'* と *O. E. D.* にあり、*Dryden* 其他いずれも動詞形の例を挙げている。*Maugham* は "*The Colonel's Lady*" の会話の中にも、この句を使っている(第1号 ex. 23)が、上例と同じく名詞形になって居り、上例は *pans* と複数になっている。いずれも小説中の会話に用いられたものである。

2. *".....you've been drawing the long bow a bit, haven't you, .....?"*

—*The Lion's Skin*

*draw the long bow*=*exaggerate* (*C. O. D.*)「ほらを吹く、大きさに云う」*Partridge* はこの表現を十九世紀から二十世紀にかけて *cliché* になったとのべ、特に陳腐な表現の一つとしている。*Maugham* はこの様な特性的な表現を、よく小説の中の会話に使っている。

3. *".....The moment he told me he was a bachelor I made up my mind that by hook or by crook I was going to marry him..."*

—*Ibid.*

*by hook or by crook*=*by fair means or foul* (*C. O. D.*)「どうしても」この表現も会話中に見出されるものであるが、*Partridge* は十八世紀より *cliché* になったとし、特に陳腐なものの一つに数へている。*Spenser* の *Faerie Queene* から *'In hope her to attain*

by hook or crook を恐らくの出典としてあげている。

4. His uniform was *spick and span*, but he wore it *shabbily*. —*Ashenden*

*spick and span*=smart and new, brand-new (C. O. D.) 「新しい, きちんとした」 Partridge は colloquial として 1870年より cliché になったとしている。この文例は会話よりとったものでなく, 文章の中に cliché を用いた例となっている。

5. I thought it a very good opportunity to *cook his goose*, and by God, sir, I cooked it. —*Lord Mountdrago*

*cook his goose*=do for him, settle his hush (C. O. D.) 「やってやる, やっつける」 Partridge は to cook someone, goose for him として, 1860年から cliché となった slang で, 二十世紀には colloquial としている。猶後半の sir は Maugham が良く使うせりふで大へん嫌味に感じる。

6. “Dr. Audlin, you must do something for me. I’m *at the end of my tether*.....” —*Ibid.*

was beyond, at the end of, his tether=(fig.) scope, extent of one’s knowledge, authority, etc. (C. O. D.) 「どうにもできない, 困った」 Partridge は to be at the end of one’s tether の句で十九世紀から二十世紀にかけて cliché になったとし, 特に陳腐なものの一つに数えている。

7. “I left her to *stew in her own juice* for a week before I went to see her...” —*Ashenden*

let person, thing, stew in his etc. own juice or grease=abstain from helping etc. (C. O. D.) 「助けないで一人でやらせる」 Partridge は to leave (or let) someone stew in his own juice として1880年より cliché となったとし, stew in one’s grease を初期の型としている。ここにいくつか挙げた例は, いずれも会話に用いられた特性的表現ともいうべき idiom-cliché である。

8. But her smile was the *coup de grâce*, and her sigh buried him deep. —*Ibid.*  
*coup de grâce*(de grahs)=finishing stroke(C. O. D.) 「決定打」 a stroke of kindness の意のフランス語から来た句で Partridge は十九世紀より cliché になったとしている。

9. All the rich stockbroker’s wives will come *on their bended knees* and beg me to paint them like you. —*Cakes and Ale*

on bended knee 「ひざまずいて」は to thank God on bended knee(s) の句の様に主

として折る時に使われる。やはり十九世紀より cliché になったと Partridge はのべている。

10. Sometimes she took him for a walk on the Chelsea Embankment, and they talked of poets *dead and gone*, and friendship, and had tea in an A. B. C. Shop. —*Ibid.*

*dead and gone* はどちらか一つで良いものを強意や口調から出来た二重句で、やはり十九世紀より cliché になったと Partridge はのべている。Shakespeare に原形があるとして例を挙げているがこれは第1号 Ex. 24 に扱った句なので省略する。

11. *Now and then* a person of title added a certain glamour ;..... —*Ibid.*

*now and then*=occasionally 「時折」は Partridge によれば十六世紀より一般に使われ出し、十八世紀から cliché になったとしている。Swift にもこの例があるのは前述の通りであるが、Maugham もよくこの句を使って居り、occasionally では置きかへられない口調の特徴などがあるので、なぜ悪いか判断に苦しむ。蓋し使われ過ぎたのであろう。他にも例は多い。いくつか挙げると

12. It was pleasant to have her beside him, and *now and then* he glanced at her sunburned, healthy face. —*Of Human Bondage*

13. "...It was thankful to be allowed to love you and I was enraptured when *now and then* I thought you were pleased..." —*The Painted Veil*

14. *Now and then* as they went by a house they heard the beating of gongs and the shrill, sustained lament of unknown instruments. —*Ibid.*

15. Unless he is at their *beck and call* they sigh and with a shrug of the shoulders say: ah, well, I suppose you're like every one else. —*Cakes and Ale*

have at one's beck, be at person's beck and call=of entire dominion and obedience (C. O. D.) 「人のいうなりになる」この句は大いに会話などで流行したものか、Partridge は特に陳腐なもの例とし1880年より cliché になったとしている。

16. He repeated *again and again* that he could not come, and begged her not to ask him ;..... —*Ashenden*

Partridge は *again and again*=frequently, repetitiously で十八世紀より cliché になったとし、*Othello* の一節を挙げている事は第1号の通りであるが、この句は今でも一般に使われ得る可能性をもっていると考えられる。しかし次の例など陳腐な感じが強い。

17. He kissed her *again and again*. —*Of Human Bondage*

18. Philip repeated himself *over and over again* what he should say to him.

—*Of Human Bondage*

この句も会話などでちょくちょく耳にするもので、Partridge は many times, repeatedly の意で十九世紀より cliché 化したとし、1637年の O. E. D. の記録をのせている。この句は前例と似ているが、更に口調的にも強調性を帯びているので、余りひんぱんに使われれば暑苦しい感じを受ける事になるのであろう。他に同様の例を2, 3挙げると、

19. "...I've seen that *over and over again*."

—*Mrs. Craddock*

20. I was exceedingly surprised to hear that she wrote everything *over and over again*.

—*The Summing Up*

この様な使い古された表現の使用を避けるべきとわかっているが、色々な situation に応じてどんな表現を以て云い変へ、且つ効果を出すべきかという問題は中々六ヶしい事である。

21. Grandiloquence is an affair of *hit or miss*;.....

—*Books and You*

hit or miss は文字通り意味を取って「一かばちか」の意をもつ doublet であるが、Partridge は二十世紀より cliché 化したとし、1708年の記録を示している。便利な表現でこれも言いかえが六ヶしい。

22. ....: there were few codes that the people who dealt with such matters could not in the end decipher and it might be that *sooner or later* through him it would be possible to.....

—*Ashenden*

sooner or later 「遅かれ早かれ、早晚」は、意味の上からは非常に便利且つ重要な表現で、唯、語と語の結びつく型式からいって陳腐になり易いと考えられるが、やはり他の表現を見つけるのが困難である。Partridge は十八世紀後半から cliché としそれも準 cliché としている。他に同様の例を挙げると

23. But *sooner or later* Sister St. Joseph returned to the subject of the mother Superior.

—*The Painted Veil*

24. : he had had a good time, he had enjoyed his *ups and downs*;.....

—*The Lion's Skin*

ups and downs は文字通り「浮き沈み」で、地面のでこぼこから人生の浮沈の意に使われ、十九世紀中葉から cliché になったと Partridge は述べている。

25. ".....and he'd taken you on out of charity because you were *down and out*..."

—Lord Mountdrago

down and out「金なし、家なし」の意の colloquialism で、二十世紀に於て準 cliché と Partridge は レッテルをはっている。

26. “.....anyhow that's *neither here nor there*.....” —Ashenden

この句は第1号 ex. 44 に扱った「そんな事はどうでも良い」の意の慣用句で、Partridge は特に it's...で始まる時と指定している。十九世紀以降 cliché になったとしている。上例は that's で it's と同様と見なされる。

27. In the short epigrammatic poems she wrote it is a matter of *hitting the nail accurately on the head*;..... —Books and You

hit nail (or right nail) on head=give true explanation, propose or do right thing, hit the mark (C. O. D.)「正しく云う、的中する」Partridge は to hit the nail on the head の句を挙げ、十六世紀より一般化し、十九世紀より cliché となり特に陳腐なものとしている。

28. He could write a sentence half a page long, rich with subsidiary clauses, that was resonant, balanced and *crystal-clear*. —Ibid.

前頁に一度引用した文であるが、この句は Partridge によれば、一度、或時代に使われ過ぎて陳腐になったが、すぐ cliché という迄もなく見向きもされなくなったと述べ二十世紀に cliché 化としている。今日でも新聞雑誌などによく見受けられる。

29. Aristocratic to his *figer-tips*. —The Lion's Skin

この句は Partridge によれば cliché と idiom の間にある表現で、have at one's finger-tips「よく通じて、知っている」は完全な cliché としている。彼は他にも相似た表現である every inch, to the core, from top to toeなどを cliché としているので、表現形態が制限されることになる。

30. ...., for the visitors admitted that they hoped to get a round or two at Rye, and here again Roy was *on the spot*, for he told... —Cakes and Ale

on the spot「そこに居た、居合せた」は Partridge により十九世紀後半から cliché になったとされている。

31. I thought the day would never *come to an end*; then all of a sudden I noticed that it was night. —Ibid.

come to an end は単に end, be concluded の意であるが、よく聞かれる句であり、



Partridge は十九世紀後半より cliché としている。特に「人生の終り」に使う時を指して言っているものと思われる。

32. You refer to your work in the most disparaging way you can and are a trifle *taken aback* to find that your host's opinion of it is the same as ours. —*Ibid.*

この句は A. Christie も比較的よく使うが、Maugham が極めて好んで使う句の一つで、前号にも扱ったので、ここでは他にいくつかの例を挙げるに止める。1880年より cliché 化したとの事である。

33. ".....and I had a fair recollection of him. I was *taken aback*...."

—*The Razor's Edge*

34. "I could see he was rather *taken aback*."—"A Friend in Need," *Cosmopolitans*

35. Mrs. Carey was *taken aback*.

—*Of Human Bondage*

36. He was so *taken aback* that he did not know what to say. —*The Magician*

37. Tolstoy strongly disapproved of Ann's love for Vronsky, and in order to *bring it home* to the reader that.....

—*Books and You*

*bring home to* はやはり前号に扱ったが、Partridge は1880年から準 cliché 化したと見なしている。他に文例をもう一つ挙げると

38. He *brought poetry home* to the common man.

—*Ibid.*

39. ".....Gerrard would have liked me to *put a good face on it*....."

—"The Social Sense," *Cosmopolitans*

*put a good (or bold) face on matter*=make it look well, show courage in facing it (C. O. D.)「よく見せかける、虚勢を張る」Partridge は *put a good face (up) on* として、1880年より cliché になったとしている。

40. ...but he wanted to *make good* his loss.

—*Of Human Bondage*

上例の *make good* は「償う」意であるが、Partridge によれば、*to succeed, to prosper* の意でイギリスで1919年アメリカで二十世紀より、それぞれ準 cliché になったと見なしている。

41. He did not look a day more than forty-five. A handsome man *in the prime of life*.

—*Up at the Villa*

「人生の最盛期」を意味するこの句は、*the prime of life*, 或は特に *in the.....* と続く時と断って cliché とし、特に陳腐な句の一つに数えている。十九世紀中葉より今世紀

にかけて cliché 化したとしている。

42. And *of course* there was a difference between the girl of nineteen, the man of forty-three: and the woman of thirty, the man of fifty-four. —*Ibid.*

of course も Partridge は cliché の一つに挙げて居り、特に無意味な或は不必要につけられた場合を云っているのであるが、会話などに於ては Maugham の作品に限らず實際上ひんぱんに使われている。上例の場合それに加えて文全体として前に一度扱った一種の text-cliché とも呼ぶべき印象をかもし出している点、文全体が陳腐な印象を受ける。

43. Philip slept *like a log* and awoke with a start to find Harold tickling his face with a feather. —*Of Human Bondage*

sleep like a top (or like a log), lay like a log などによく使われて来た通俗的な idiom で、この場合は context から見て感じの出ている表現ともいえる。Bateman は lay like a log を cliché の例として挙げている。

44. “But it’s *raining cats and dogs*, and you’ll get wet through if you come.”

—*Mrs. Craddock*

この句は前号にも扱ったもので会話などでは、(特に英国系で) 一方 cliché とレッテルをはられているにも拘らず、今だに流通性のあるものらしい。Partridge が特に陳腐な表現と見なしている事は前号に調べた通りである。

45. “.....We’re going forwards *by leaps and bounds*. .....”

—*The Razor’s Edge*

by leaps and bounds=with startlingly rapid progress (C. O. D.)

この句は onomatopoeic な極めて語調も良い句であり、会話などにひんぱんに使われている事は多くの例でわかるが、Partridge は1880年より cliché になったとし、特に go ahead by に続く時そうだとしている。上例も会話の例ながら同じ型と見られる。

46. The plain man is justified in *sitting on the fence*, but perhaps he is prudent to keep his legs dangling on the side of determinism. —*The Summing Up*

sit on the fence=remain neutral in contest, not take sides (C. O. D.) 「どっちつかず中立の」この句は「いわゆる」などと前置きしてよく聞かれる慣用句であるが、Partridge は1870年より cliché 化したとし、特に陳腐な表現の一つと見ている。

## VII

ここでもう一度 Maugham の文体と cliché を通して考えて見ると、style というものには理屈では割り切れない何物かがあるという事を、あらためて思い知らされる。即ち幾つかの知識に基いて分析しても、し切れない。何か感覚に訴えて来るものがある。これが Maugham の文体から受ける何かである。私にはこの感じは極めて日本的という風に感じられる。日本的といっても、つつましいとか、ひかへ目とかではなく悪い意味の、即ち理屈っぽく、こせこせとよく気がつき、世間ずれした点、先手を打って人の意表に出るこかつき、はったりをかける独善性、これらはいづれも何か劣等感を裏がえした様な特徴となって現れている。Maugham が日本で受ける原因も、こんな所にあるのであろう。彼がいわゆる英国的でないのは、育ちの良さから来る応揚性と、たたき上げて功をなした人の用心深さの違いであらう。Maugham と cliché は、何か日本の感覚（というより西洋人ばなれしたみみちさ）に端を発していると考えられない事はない。

彼は又通俗的で人が余りいわない単語を好んで使う。grotesque, eccentric, handsome, agony, gasp, sallow, stocky など一体に何か表現が露骨で大きさである感を受ける。このいわゆるオーヴァーな点が、彼の style 其の他から飽きをこさせる原因をなしている様である。彼はいつも時代に当る事に敏感であった。idiom を多く使う事に関しては前に扱ったが、*The Summing Up* の中に又次の様な文がある。

One should write in the manner of one's period. The language is alive and constantly changing; to try to write like the authors of a distant past can only give rise to artificiality. I should not hesitate to use the common phrases of the day, knowing that their vogue was ephemeral, or slang, though aware that in ten years it might be incomprehensible, if they gave vividness and actuality. If the style has a classical form it can support the discreet use of a phraseology that has only a local and temporary aptness. I would sooner a writer were a vulgar than mincing, for life is vulgar, and it is life he seeks. (和訳省略)

以上の文から見ても、常に彼の行動には而るべき理屈があり、一つ一つ考えて artificial な態度で望むかと思えば、極端に又これを否定するといった事態がよく起っている。考えすぎて自己矛盾に陥っている様に見受けられる反面、必ず理由をつけて、それらから逃避する cleverness も十分備えている。

以上 Maugham の文体の特殊性、後進性、cliché などについて概観したのであるが、結局これらは彼の最初におかれた環境より必然的に来る作文態度人生観などの総合的結実であり、古い伝統に反ばつし、進歩性を唱えて而も徹底的に現代風になりきれず、他の作家には母国の土着性を要求し、純粋に民族性などを標榜する反面、自身は英国の土着にもつげず、又コスモポリタンに徹するには基礎弱く、且つそれだけの包含性に欠け、俗に云う純文学と通俗作家の中間の地位に甘んずるに至る点などと共に、彼の余りにも artificial な作文態度は現代の目からは、時代的限界を見せ始めて居り、今後時代の経つと共に文体に於ても現代作家として、英国作家として、或は cosmopolitan 作家として、我々の通俗表現 (cliché) を用いるならば、「鳥なり里のこうもり」となっていくのではないかと考えられる。

猶「Cliché 序論」と題する研究の内、本稿では特に Maugham の文体をとり上げ、これを中心として考察したのであるが、今後はこれに引続いて George Arms 教授の cliché の修正表現及び Frank. Sullivan の研究を紹介し検討して見たいと念じている。